



Title	坂口安吾の研究 [全文の要約]
Author(s)	山路, 敦史
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第13412号
Issue Date	2019-03-25
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/74447">http://hdl.handle.net/2115/74447</a>
Type	theses (doctoral - abstract of entire text)
Note	この博士論文全文の閲覧方法については、以下のサイトをご参照ください。
Note(URL)	<a href="https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/">https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/</a>
File Information	Atsushi_Yamaji_summary.pdf



[Instructions for use](#)

# 学位論文内容の要約

博士の専攻分野の名称：博士（文学） 氏名： 山 路 敦 史

学位論文題名

坂口安吾の研究

本論文は、坂口安吾という作家のイメージにつきまとう批評性というものを、安吾のテキスト分析を通じて批判的に検討することを目的とし、安吾のテキストの批評性を構築する構成や文体、論法に自己相対化・批評的な契機を認めるものであり、序論及び結論と本論（全三部一四章）で構成されている。

序論「安吾研究の現在と課題」は、従来の安吾研究を概観した上で、安吾の批評性を問い直す視点の必要性を示すもので、全三節で構成されている。1「安吾研究の現在と課題」においては、これまでの安吾の評価や研究史について、「無頼派」に寄せられた評価まで遡って再検討し、安吾が好意的に読まれてきた評価のポイントを確認しながら、今日安吾を新たに読み直す際の指針となり得る優れた安吾批判についても取り上げ、総じて安吾の研究状況を再検討した。2「二つの「教祖の文学」——「教祖の文学」と色川武大「眼の性のよさ」」においては、安吾が小林秀雄を「教祖」と名指して批判した「教祖の文学」と安吾が「教祖」化されることへの警鐘を鳴らした色川武大の優れた安吾論「眼の性のよさ」を比較考察した。色川の安吾論は、安吾の小林批判を経由して読むことで、その安吾批判の強度が確認できるテキストである。両テキストに共通する「目」の問題系を抽出しつつ、小林への批判の妥当性ではなく、「教祖の文学」というテキストそのものに否定の論理を認め、その批評性を構築する構造を評価した。3「問題設定と本論文の構成」においては、安吾を再検討するための視座として、概念化への希求を戯画化した「周章て者」や概念化を拒む「退屈」が重要であることを示し、安吾の作家活動の出発期に前後する「周章て者」と「退屈」の諸相についても、同時代の資料から確認した。また、「ふるさと」というキーワードで安吾が概括されていることを問題視し、「文学のふるさと」以前にみられる安吾の「ふるさと」まで遡って検討すること、「文学のふるさと」そのものの再読、そして「ふるさと」という語の独自性に覆われていたがために、一般論的に位置づけられてきた〈故

郷)についても再検討する必要性を述べた。さらに、批評対象を語る際にそこで対象とされる制度や慣習が形成されるまでの〈起源〉を語るという方法が安吾の批評性を担保していることに着目し、テキスト分析を通じてそれを検証する視点を示した。

第一部「「周章て者」と「退屈」の諸相」では、これまで本格的に検討されてこなかった「周章て者」と「退屈」の語を鍵として、「ファルス」という用語で括られがちな安吾初期のテキストを捉え直した。第一章「主題としての〈武蔵野〉——「木枯の酒倉から」」においては、国木田独歩「武蔵野」を嚆矢とする〈武蔵野〉のイメージ史との関連性に目配りをしつつ、「狂人」が自らの身体の不調や酒の痛飲の責任など諸々のすべてを〈武蔵野〉に転嫁している点に、〈武蔵野〉を語る「周章て者」の表象を指摘し、「木枯の酒倉」を〈武蔵野〉の文学として位置づけるとともに、「風博士」へと通じる「周章て者」表象の始まりを確認した。第二章「「周章て者」再考——「風博士」」においては、「僕」が語る内容とその「僕」が「諸君」へ一読を促した「風博士の遺書」の書かれた内容の矛盾について、ほかならぬ「僕」が一切目を配っていないことに着目し、論理的な説明への配慮などを見せることなく、「風博士は自殺した」という結論に向かおうとする「僕」を「周章て者」として捉え、現実の矛盾や困難を性急な一元的表象によって解消しようとする姿勢への戯画化を読み取った。第三章「「頭の悪い私」の射程——「村のひと騒ぎ」」においては、「村のひと騒ぎ」の〈現実〉を無視するという村人たちの態度や結末、「東京」の「私」が「物語」と〈現実〉との不一致に戸惑う姿勢などを同時代の農民文学論争の問題系との切り結びにおいて把握し、〈現実〉を性急に説明できない「私」が「頭の悪い私」と自嘲するところに「周章て者」へのアイロニーを読み取った。第四章「「退屈」で「うるさい」テキスト——『吹雪物語』」においては、『吹雪物語』に寄せられた否定的評価を同時代のベストセラーである『結婚の生態』に寄せられた高評価とそれへの安吾の批評とにおいて比較考察することを起点として、『吹雪物語』の物語内容とそこでの「退屈」表象を同時代の「ひとつの思想」への抵抗概念として捉え直し、作中の「噂」や「地方新聞」と関連づけた上で、再評価した。

第二部「「ふるさと」の再検討」では、「周章て者」や「退屈」の表象が、『吹雪物語』で述べられたところの「ひとつの思想」への批評的な態度と機能を帯びていたとする第一部での論述を踏まえつつ、安吾の文学を概括する「ふるさと」の再検討へと向かった。また、「ふるさと」と区別され、総じて一般的な意味合いにおいて把握されてき

た〈故郷〉表象についても、〈武蔵野〉という視点を取り入れることで再評価した。第五章「統合／拡散のテキスト——「ふるさとに寄する讃歌」」では、「ふるさとに寄する讃歌」を「ふるさと」という主題への統合とそのような一義的な主題への統合から逃れ去ろうとする拡散という二つの志向性を持つテキストとして読み直し、「ふるさと」という表象の自己相対化という以降のテキストにも通じ得る問題系を析出した。第六章「主題への抵抗——「帆影」「海の霧」」においては、ここまで論じてきた統合する表象としての「ふるさと」の機能とそれへの抵抗となり得る「退屈」に着目し、「帆影」には、すべてを説明してくれる「ふるさと」という表象とそのような表象による主題が存在しなければ、物語的な山場はなく、結末も未完結性に彩られてしまうことを読み取り、「ふるさと」という語に強い主題性が織り込まれていることを逆説的に明らかにするテキストとして評価した。「海の霧」には、粹小説という形式において、物語的な結末が「驚愕」や「破裂」ということで予想外のものとして予告されていたにもかかわらず、結末では「逆説」という「説」で説明づけられてしまうことを確認しつつ、そのような既知の体系に収まらないわけのわからなさが宿されていた作中の液状化のイメージに、「説」というものへの相対化の機能を指摘した。第七章「「周章て者」「退屈」との接続——「文学のふるさと」」においては、太宰治「逆行」や『伊勢物語』第六段という先行テキストを参照し、とりわけ「文学のふるさと」における『伊勢物語』第六段の解釈に「ふるさと」という主題とは別の「周章て者」への回路と「退屈」が介入する余地を見出し、「文学のふるさと」の「ふるさと」とは別の読みの方向性を示した。第八章「〈武蔵野〉と〈故郷〉——初期テキストから「盗まれた手紙の話」まで」においては、〈武蔵野〉という観点が安吾のテキストの〈故郷〉表象を捉え直す視点となることを示した。とりわけ、「盗まれた手紙の話」よりも後のテキストにおける〈武蔵野〉は、回想の対象として描かれており、第三部での〈起源〉を語る批評方法との関連性を指摘できる。安吾の〈武蔵野〉が「木枯の酒倉から」から次第に変容し、批評的な舞台として設定されたことを明らかにしつつ、〈武蔵野〉が〈故郷〉への媒体となっているところに、〈故郷〉への批評的な距離を確保するための場という機能を読み取った。

第三部「方法としての〈起源〉」では、前章までの〈武蔵野〉と〈故郷〉との近接性も踏まえつつ、安吾の〈起源〉を語るという方法と批評性の構築との関連について、何らかの形で〈起源〉が活用されているテキスト群から分析した。第九章「「小説家」

の〈起源〉——「風と光と二十の私と」においては、「風と光と二十の私と」に〈武蔵野〉と〈故郷〉との重なりを指摘しつつ、そのような〈故郷〉の魅力を突き放す「ふるさと」を見出すことが「私」が「小説家」になるための条件として提出されていることを示しつつも、そのような「ふるさと」が大事であるというような物語的に完結した構造が「白々しい」と総括されるところに、安吾の作家活動を「ふるさと」という語で総括してしまう研究方法にこそ向けられる批評となり得ることを指摘した。第一〇章「「お喋り」なテキスト——「桜の森の満開の下」」においては、「桜の森の満開の下」でしばしば指摘される独自性は、従来の桜のイメージを「これは嘘です」と一蹴してみせた身振りによるところが大きいのではないかという視点から出発し、語り手のしたたかな「お喋り」や直喩を多用する抽象的な世界観の構築を中心に分析しつつ、末尾の「孤独」という語の扱いについて「文学のふるさと」との対応ではなく、桜をめぐる制度・慣習批判を可能とする「孤独」というまた別の制度が構築されていると示す叙述の性格を指摘し、そこからの逸脱の契機を語り手の「あるいは」「といふもの」「かもしれません」といった言い淀みに認めた。第十一章「巨勢博士の消失——安吾のミステリ論と「不連続殺人事件」「影のない犯人」」においては、制度や規範あるいは思考の固定化を批判した安吾が、完結性のある「ゲーム」と定義したミステリを文学との比較対照によってどのように捉えたのかをミステリ論の変容から辿った。また、探偵が存在しないミステリである「影のない犯人」を取り上げ、「不連続殺人事件」からの探偵の造型の変化を補助線としつつ、安吾における文学／ミステリという境界を再定義した。第十二章「〈原爆詩〉の機能——「肝臓先生」」においては、肝臓先生についての詩を書く「私」が、その〈起源〉に「放射能」を用いた上で、紋切り型の〈原爆詩〉を書いてしまうという点に、肝臓先生を賛美しようとする「私」の目的との矛盾を指摘し、そのような矛盾が偉人として扱われる肝臓先生の歴史的美談への批評となっていることを示した。さらに、テキストに矛盾に批評性の契機を宿らせ、その批評的な機能が発揮できるような宛先までもテキスト内に用意しておくという点に、矛盾を縫合するのはまた別の隠蔽・解消方法を読み取った。第十三章「〈起源〉のシミュレーション——「保久呂天皇」」においては、従来の安吾の天皇（制）論の研究が、個人としての天皇と天皇制とを区別し、もっぱら後者を問題化してきたのが安吾であるという作家イメージを批判的に捉え直すために、天皇の位置に立つものが天皇制のシステムを利用して権力を獲得・行使していく可能性を描いた小説として「保

久呂天皇」を再評価した。また、戦後の偽天皇騒動や戦後巡幸との切り結びをテキストに認めつつ、同時代の天皇（制）論の課題としてあった天皇の存在を含めて天皇制を再考する点への安吾の応答として「保久呂天皇」を歴史的にも位置づけた。第一四章「教訓」をめぐって——「夜長姫と耳男」においては、当初はヒメへの対抗手段としてあった耳男の仏像制作が、ヒメからの評価が正反対であるにせよ結局は二体の仏像のどちらにおいてもヒメへの対抗の手段にはなっていないことを出発点として、「夜長姫と耳男」は批判対象への反抗の身振りが当の批判すべき対象に賛美され、マニュアルとして説明されてしまう構造を持っていることを指摘した。その上で、このような「夜長姫と耳男」というテキストの存在について、安吾の批評を制度や慣習への反抗と総括する向きに対しての批評となって（とりわけ安吾を評価する）読者にはね返ってくると評価した。

結論「本論文の成果と課題」は、二節で構成される。1「本論文の成果」では、本論文で展開した議論を各部各論ごとにあらためて整理し、その成果を確認した。2「本論文の課題」では、本論文の成果を踏まえた上で批評性のある安吾像を再検討するためのさらなる視点として、「ファルス」論の再検討を中心的な課題として挙げ、さらにほかの安吾のテキストについても部分的ではあるが読みの指針となり得る視点を示した。また、テキストの内在的な分析を中心に従来 of 安吾像を批判的に検証しようとする本論文の性質上、部分的に参照することしかできなかったほかの作家やそのテキストについても、「退屈」や「周章て者」の観点から見るべきものを指摘した。さらに、安吾の批評性を構築する文体に着目し分析することは、批評性というものに価値が置かれているように思える文学研究のあり方自体への批評的な距離の確保に通じ得ることを示し、安吾とその安吾を研究することの意義を今日的な研究状況のなかに位置づけた。